

# 過疎山村に住む高齢女性の パーソナル・ネットワークの基本的特徴

野邊 政雄

筆者は2006年2月に過疎山村である岡山県鏡野町富地域に居住する高齢女性に面接調査を実施した。本稿では、そのデータを分析することによって、①パーソナル・ネットワークの規模、②その構成、③性別と年齢での社会関係の同質性、④ソーシャル・サポートの入手を検討した。

**Keywords** : 鏡野町富地域, 高齢女性, パーソナル・ネットワーク, ソーシャル・サポート

## 1 本稿の目的

ほとんどの個人はさまざまな間柄の社会関係を他者（同居家族員、親族、近隣者、友人、職場仲間など）と取り結んでいる。そして、そうした他者からさまざまなサポートを受け取って、暮らしている。高齢者は身体的活動能力が低下しているから、社会関係を取り結んでいる他者からのサポートは毎日の生活をおくるうえでとりわけ重要である。そのため、高齢者が組織しているパーソナル・ネットワーク（＝個人が他者と取り結んでいる社会関係の総体）は最近の社会学や社会老年学において関心を集めている研究テーマの1つとなっている。

さて、筆者は過疎山村である岡山県鏡野町富地域で高齢女性を対象にパーソナル・ネットワークを調査した。これは、調査票を用いた、調査員による個別面接調査である。本稿では、そのデータを分析することによって、山村に住む高齢女性が組織するパーソナル・ネットワークの基本的特徴を明らかにしたい。具体的には、次の4点を解明する。①パーソナル・ネットワークの規模。つまり、パーソナル・ネットワークは何人の人々から成りたっているか。②パーソナル・ネットワークはどのような間柄の人々から構成されているか。③パーソナル・ネットワークを構成する人々は高齢女性本人とどの性別や年齢で同質的であるか。④高齢女性は社会関係を取り結ぶ人々からどのようなサポートを入手

するか。また、それぞれの間柄の社会関係はどのようなサポートを主に提供するか。

## 2 研究方法

### (1) 調査地の概要

鏡野町富地域は、岡山県の北部にあり、苫田郡の西端に位置する。富地域は東西約11.5キロ、南北約11キロあり、面積は76.13平方キロである。1889年の市制町村制によって行政村としての富村は成立したが、2005年3月に周辺の町村と合併し、鏡野町の一部となった。2005年現在、富地域の人口は778人、世帯数は288戸である。65歳以上の高齢人口の割合は38.8%である（国勢調査による）。

住民基本台帳によれば、2006年1月現在65歳以上80歳未満の女性は富地域に125人いたが、その高齢女性すべてを調査することにした。2006年2月に民生委員が該当する高齢女性を訪問し、面接調査をした。有効票数は104であり、無効票数は21であった。無効票の内訳は、実際には富地域に居住していない12人、回答拒否5人、病気で調査不可2人、不在1人、死亡1人であった。

本調査を実施する際に、次のような倫理的配慮を払った。事前にハガキで調査対象者へ調査の趣旨を説明した上で、調査に回答することを承諾した調査対象者にのみ調査を実施した。

## (2) 調査項目

高齢女性が取り結ぶ社会関係を測定するため、①回答者が入院した場合の世話、②2～3万円の借金、③仕事上の話や相談、④心配事の相談、⑤失望や落胆をしているときの慰め、⑥留守のときの家の世話、⑦些細な物やサービスの入手、⑧交遊、といった8つの日常生活の状況で、サポートを期待できる相手の名前や過去3ヶ月以内に交際をした相手の名前を尋ねた。①から⑤までの質問では同居する家族構成員を含めて相手の名前をあげてもらい、⑥から⑧までの質問では、同居する家族構成員を除いて相手の名前をあげてもらった。それと、③の質問は就業している回答者へのみ尋ねた。回答者が8つの質問で同一の何を何回もあげることがあるが、そうした相手は1人と数える。こうしてあげられた人を問柄によって、(1)同居家族、(2)(家族外の)親族、(3)近隣者、(4)友人、(5)職場仲間(上司や同僚)の5つに分けた。それぞれに該当する人の人数を計算して、同居家族関係数、親族関係数、近隣関係数、友人関係数、職場仲間関係数を求めた。さらに、これらの社会関係数を合計して、パーソナル・ネットワークの規模(=社会関係の総数)を算出した。

同居家族関係と親族関係の操作的定義に注意が必要である。この測定方法では、同居する家族構成員であるというだけでは同居家族関係を取り結んでいるとはならないし、血縁や婚姻で結びついているというだけでは親族関係を取り結んでいるということにはならない。回答者が上述の8つの状況でサポートを求めることができるとか、交際をしているとして名前をあげたとき、同居家族関係や親族関係を取り結んでいるということになる。

ところで、ソーシャル・サポートはいくつかの種類に分けることができる。古谷野ほか(1995)や横山ほか(1994)は、ソーシャル・サポートを「手段的サポート」、「情緒的サポート」、「同伴行動」の3つに分けている。物や労力を提供する支援が手段的サポート、相談にのったり励ましたりする支援が情緒的サポートである。さらに、個人は他者と話をするだけでも癒やされたり、安心できたりするから、同伴行動もソーシャル・サポートと見なしうる。これに従って、本調査のソーシャル・サポートの項目を分類すれば、①回答者が入院した場合の世話、②2～3万円の借金、⑥留守のときの家の世話、⑦些細な物やサービスの入手の4つが「手段的サポート」、③仕事上の話や相談、④心配事の相談、⑤失望や落胆をしているときの慰めの3つが「情緒的サポート」になる。⑧交遊には「同伴行動」だけでなく、電話や手紙での交際も含まれているが、「同伴行動」

にはほぼ相当する<sup>(1)</sup>。「手段的サポート」を負担の軽重によって分類すると、①回答者が入院した場合の世話、および、②2～3万円の借金が負担の重い「手段的サポート」に、⑥留守のときの家の世話、および、⑦些細な物やサービスの入手が負担の軽い「手段的サポート」になる。

## 3 結果

## (1) パーソナル・ネットワークの規模

回答者一人あたりのパーソナル・ネットワークの規模の平均を求めると、6.63(標準偏差, 2.92)となる。社会関係をまったく組織していない回答者はおらず、少なくとも2人と社会関係を取り結んでいた。他方、最も社会的な回答者は17人と社会関係を取り結んでいた。パーソナル・ネットワークの規模が4人から7人の回答者が多く、全体の60.6%を占めている。

## (2) パーソナル・ネットワークの構成

前述のように、回答者一人あたりのパーソナル・ネットワークの規模の平均は6.63であった。その問柄別の内訳は、同居家族関係0.91(標準偏差, 0.86)、親族関係2.69(標準偏差, 1.80)、近隣関係2.19(標準偏差, 2.11)、友人関係0.77(標準偏差, 1.58)、職場仲間関係0.06(標準偏差, 0.59)である。職場仲間関係を取り結んでいたのは、1人の回答者だけであった。社会関係を取り結ぶ相手の構成割合を問柄別に計算すると、親族が40.6%と最も割合が高く、同居家族が13.8%、近隣者が33.1%、友人が11.6%を占め、職場仲間が0.9%とほんのわずかである。これらの数値から、パーソナル・ネットワークの中で、同居家族や親族といった血族や姻族の占める割合が54.4%になることが分かる。また、親族に次いで近隣者の占める割合が高いことも注目し得る。

回答者は社会関係を取り結ぶ相手とし平均で6.63人をあげた。これは、104人の回答者はそうした相

表1 同居家族関係を取り結ぶ相手の続柄

続柄	人数 (人)	構成割合 (%)
夫	43	6.2
息子	20	2.9
娘	11	1.6
息子の配偶者	12	1.7
娘の配偶者	2	0.3
孫	6	0.9
その他の親族	1	0.1
合計	95	13.8

(注)社会関係総数689を母数として構成割合を計算した。

手として合計で689人をあげたということである。そのうち、同居家族は95人であり、親族は280人である。同居家族と親族を続柄別に集計し、その構成割合を計算すると、表1と表2のようになる。構成割合は、社会関係の総数である689で割って計算をした。表1から、回答者が同居家族としてあげたのは、配偶者、子ども（息子と娘）と子どもの配偶者といった1親等以内の親族が大部分であることが分かる。表2から、回答者が親族としてあげた主な相手は、子ども（息子と娘）、子どもの配偶者、兄弟姉妹、夫の兄弟姉妹、本人や夫の兄弟の配偶者といった2親等以内の親族であることを看取できる。

表2 親族関係を取り結ぶ相手の続柄

親等	続柄	人数 (人)	構成割合 (%)
1	息子	40	5.8
1	娘	62	9.0
1	息子の妻	23	3.3
1	娘の夫	2	0.3
2	兄弟	17	2.5
2	姉妹	48	7.0
2	夫の兄弟	5	0.7
2	夫の姉妹	10	1.5
2	兄弟の妻	7	1.0
2	夫の兄弟の妻	11	1.6
2	夫の姉妹の夫	1	0.1
2	孫(男)	3	0.4
2	孫(女)	9	1.3
2	孫の妻	1	0.1
3	夫の叔母	1	0.1
3	甥	3	0.4
3	姪	4	0.6
3	夫の甥	2	0.3
3	夫の姪	1	0.1
3	夫の甥の妻	1	0.1
4	従兄弟	2	0.3
4	従姉妹	2	0.3
4	夫の従兄弟	6	0.9
4	夫の従姉妹	1	0.1
4	従兄弟の妻	5	0.7
4	夫の従兄弟の妻	4	0.6
	その他の親族	9	1.3
	合計	280	40.6

(注) 社会関係総数689を母数として構成割合を計算した。

表2では、5親等以上の遠縁の親族を回答者本人方の親族であるか夫方の親族であるかに区別していない。4親等内の親族で見ると、回答者は本人方の親族だけでなく夫方の親族も多くあげている。子どもや孫などといった回答者とその夫に共通の親族を除くと、回答者の親族は88人であり、夫の親族は43人である。

### (3) 社会関係の同質性

まず、回答者と回答者が社会関係を取り結ぶ相手とが性別でどのくらい同じであるかを見たい。それぞれの間柄の社会関係ごとに女性の割合を計算し、表3に示す。回答者が社会関係を取り結ぶすべての相手の71.0%が女性であるというように、女性の割合が高い。このことから、高齢女性は同性である女性と社会関係を取り結ぶ傾向があることが分かる。間柄ごとに女性の割合を見ると、同居家族関係以外の社会関係では女性の占める割合が高い。とくに、友人関係では、女性の割合は91.3%にもものぼる。同居家族関係に占める男性の割合が相対的に高いのは、同居家族関係に夫が多く入っているからであることは言うまでもない。

次に、回答者と回答者が社会関係を取り結ぶ相手とが年齢でどのくらい近いかを見たい。回答者の平均年齢は73.64歳（標準偏差, 3.64）である。間柄ごとに相手の平均年齢を算出するとともに、回答者と相手との年齢差の平均を計算し、やはり表3に示す。同居家族の平均年齢は58.66歳、親族のそれは58.39歳というように、同居家族と親族の平均年齢が低い。また、同居家族と回答者との年齢差の平均は17.16歳、親族と回答者との年齢差は17.58歳というように、同居家族および親族との年齢差が大きい。これは、同居家族と親族の多くが自分の子ども（息子と娘）とその配偶者であることが一因である。他方、近隣者の平均年齢は69.30歳、友人の平均年齢は70.41歳というように、近隣者と友人の平均年齢が高い。また、近隣者および友人との年齢差の平均は小さいが、友人と回答者との年齢差の平均はとく

表3 それぞれの間柄の社会関係における女性の割合、平均年齢、回答者との年齢差の平均

間柄	女性の割合 (%)	平均年齢 (歳)	標準偏差	回答者との 年齢差の平均 (歳)	標準偏差
同居家族	27.4	58.66	17.97	17.16	15.10
親族	70.4	58.39	14.89	17.58	12.28
近隣者	82.0	69.30	9.65	8.03	7.56
友人	91.3	70.41	6.78	4.56	5.00
職場仲間	100	72.00	2.90	2.33	1.37
すべての社会関係	71.0	63.55	14.02	12.72	11.93

に小さく、4.56歳にすぎない。

回答者は職場仲間関係をすべて女性と取り結んでいた。その平均年齢は72.00歳と回答者の年齢に非常に近く、職場仲間と回答者との年齢差はとても小さく、2.33歳である。このように、職場仲間関係はきわめて同質的である。しかし、職場仲間関係を取り結ぶ回答者は1人だけであったから、それらの数値から同質性について論じにくい。そこで、職場仲間関係の同質性について、本稿ではこれ以上言及しないことにする。

#### (4) ソーシャル・サポート

高齢者が他者と取り結ぶ社会関係に関する多くの先行研究では、高齢者個人を分析単位としてソーシャル・サポートの授受を集計した。具体的には、特定の間柄にある他者からサポートを入手できる高齢者の割合を算出するといった集計である(野辺2001)。高齢者を対象者として調査をおこなったのであるから、このようなケース単位での分析はきわめて妥当であり、結果もそれなりに有用である。しかし、高齢者は、通例、複数の他者と社会関係を取り結んでおり、社会関係を取り結ぶ相手の人数は間柄別にそれぞれ1人とは限らない。高齢者を分析単位にして社会関係についての情報を集計すると、それぞれの社会関係に関する多くの情報が失われてしまう。ケース単位の分析にこのような欠点があることから、高齢者が取り結ぶ社会関係を分析の単位として、ソーシャル・サポートの授受を集計するようにもなった(古谷野ほか1994;古谷野ほか1995)。具体的には、高齢者が取り結ぶある間柄の社会関係すべてのうち、高齢者にサポートを提供する社会関係の割合を算出するといった集計である。このようにタイ(tie)単位で集計すれば、社会関係の状態をより精確に把握できる。そこで、本稿では、ソーシャル・サポートについてのデータをケース単位とタイ単位で集計し、両者の結果を比較したい。

まず、ケース単位で集計した結果を提示する。表4は、8つの状況でそれぞれの間柄にある他者にサポートを期待できる回答者の割合、あるいは、それ

ぞれの間柄にある他者と「交遊」した回答者の割合を示している。最下欄の数値は、各状況でいずれかの相手にサポートを期待できる回答者の割合、あるいは、いずれかの相手と「交遊」した回答者の割合である。表4の同居家族の欄を見ると、同居家族に「入院時の世話」をしてもらえる回答者の割合は52.9%であることを読み取れる。同表をこのように見てゆくと、次の4点が明らかとなる。

第1に、回答者は負担の重い手段的サポートや情緒的サポートを主に同居家族と親族に期待できることである。表4より、同居家族に「入院時の世話」をしてもらえるのは回答者の52.9%、「借金」をできるのは29.8%、「心配事の相談」をできるのは34.6%、「慰め」てもらえるのは29.8%であることを読み取れる。そして、同表から、親族に「入院時の世話」をしてもらえるのは回答者の67.3%、「借金」をできるのは50.0%、「心配事の相談」をできるのは48.1%、「慰め」てもらえるのは55.8%であることを看取できる。このように、回答者は負担の重い手段的サポートや情緒的サポートを主に同居家族と親族に期待できる。ただし、これら4つの状況で回答者が同居家族と親族にサポートを期待できる割合を子細に見てゆくと、いずれの状況でも親族にサポートを期待できる割合は、同居家族に期待できる割合よりもかなり高い。それゆえ、負担の重い手段的サポートや情緒的サポートをとりわけ親族に期待できるということになる。

第2に、回答者は、負担の軽い、近接性が必要な手段的サポートを主に親族や近隣者に期待でき、「交遊」を主として親族や近隣者とおこなっていることである。表4から、親族に「留守時の家の世話」を頼めるのは回答者の31.7%であり、「些細な物やサービスの入手」を期待できるのは24.0%であり、親族と「交遊」をおこなっていたのは40.4%であることを読み取れる。そして、同表より、近隣者に「留守時の家の世話」を頼めるのは回答者の47.1%であり、「些細な物やサービスの入手」を期待できるのは27.9%であり、近隣者と「交遊」をおこなっていたのは54.8%であることを看取できる。このように、

表4 それぞれの間柄にあるいずれかの相手にサポートを期待できる回答者の割合

間柄	入院時の世話	借金	仕事上の話と相談	心配事の相談	慰め	留守時の家の世話	物・サービスの入手	交遊
同居家族	52.9	29.8	1.0	34.6	29.8	—	—	—
親族	67.3	50.0	1.9	48.1	55.8	31.7	24.0	40.4
近隣者	0	11.5	1.9	26.9	15.4	47.1	27.9	54.8
友人	1.0	4.8	0	4.8	6.7	3.8	5.8	26.9
職場仲間	0	0	0	0	0	0	0	1.0
いずれかの相手	97.1	79.8	2.9	93.3	90.4	78.8	51.9	90.4

表5 回答者にサポートを提供する社会関係の割合

間柄	入院時の世話	借金	仕事上の話と相談	心配事の相談	慰め	留守時の家の世話	物・サービス入手	交遊	関係数
同居家族	76.8	46.3	2.1	42.1	38.9	—	—	—	95
親族	44.3	31.1	1.8	30.0	33.9	15.7	12.1	27.5	280
近隣者	0	7.5	0.9	17.1	10.5	32.0	17.5	64.9	228
友人	3.8	10.0	0	8.8	15.0	6.3	10.0	87.5	72
職場仲間	0	0	0	0	0	0	0	100	6
すべての社会関係	29.0	22.6	1.3	24.7	24.4	17.7	11.9	43.7	689

多くの回答者は負担が軽くて、支援者が近くにいることが必要な手段的サポートを主に親族や近隣者に期待でき、「交遊」を主として親族や近隣者としていた。ただし、「留守時の家の世話」と「些細な物やサービスの入手」を期待できる割合を詳細に見ると、近隣者に期待できる高齢女性の割合は親族に期待できる高齢女性の割合よりも高い。また、近隣者と「交遊」した高齢女性の割合は親族と「交遊」した高齢女性の割合よりも高い。そこで、負担の軽い、近接性が必要な手段的サポートをとりわけ近隣者に期待でき、「交遊」をとくに近隣者としているということになる。

第3に、回答者は、友人を主に「交遊」のために利用していたことである。表4によれば、友人に手段的サポートや情緒的サポートを期待できる回答者の割合は、いずれの状況でも6%未満と低い。ところが、友人と「交遊」をおこなっていたのは回答者の26.9%と、その割合が比較的高い。

第4に、職場仲間関係はサポートの提供や「交遊」でほとんど役割を演じていないことである。表4から、職場仲間と「交遊」する回答者の割合は1.0%であるが、これ以外の状況で、回答者は職場仲間をサポートをまったく期待できないことを読み取れる。このように、回答者は職場仲間手段的サポートや情緒的サポートをまったく期待できず、職場仲間と「交遊」をほとんどしていない。

第5に、回答者は多くの状況でいずれかの相手にサポートを期待でき、いずれかの相手と「交遊」していたことである。表4の最下欄にある数値が低いサポート状況は、「仕事上の話と相談」(2.9%)と「些細な物やサービスの入手」(51.9%)の2つである。前者のサポート状況でいずれかの社会関係を利用できる回答者の割合が低いのは、企業に勤務する回答者が少なかったからである。働いている回答者は多いけれど、その多くが単独(7人)であるいは家族従業者(22人)として農業をしており、企業に勤める常雇の一般従業者(1人)やパート・アルバイト(3人)はきわめて少ない。自営で農業をしている人は、「仕事上の話と相談」をあまりしない。それをする

のは、主に企業に勤める雇用者である。回答者の中には雇用者がほとんどいないから、「仕事上の話と相談」をする回答者の割合がとて小さくなったのであろう。「些細な物やサービスの入手」をできる回答者の割合は低いから、このサポートは同居家族外の人々から入手できにくかったことになる。これら以外の状況では、大部分の回答者はいずれかの相手にサポートを期待でき、いずれかの相手と「交遊」をしていた。

次に、タイ単位で集計した結果を提示する。表5は、それぞれの間柄にある社会関係の中で、回答者にサポートを提供する社会関係の割合、あるいは、「交遊」のために利用された社会関係の割合を示している<sup>(2)</sup>。同表の同居家族の欄を見てゆくと、回答者が「入院時の世話」をしてもらえるのは同居家族関係のうちの76.8%によってであることを読み取れる。同表をこのように見てゆくと、次の4点を指摘できる。

第1に、同居家族関係と親族関係が負担の重い手段的サポートや情緒的サポートの提供で重要なことである。表5から、回答者が「入院時の世話」を期待できるのは同居家族関係のうちの76.8%、「借金」をできるのは46.3%、「心配事の相談」ができるのは42.1%、「慰め」てもらえるのは38.9%であることを看取できる。そして、回答者が「入院時の世話」をしてもらえるのは親族関係のうちの44.3%、「借金」をできるのは31.1%、「心配事の相談」ができるのは30.0%、「慰め」てもらえるのは33.9%であることも読み取れる。このように、同居家族関係と親族関係は負担の重い手段的サポートや情緒的サポートを入手するためによく利用されている。

第2に、近隣関係は、「留守時の家の世話」や「交遊」で重要なことである。表5から、回答者が「留守時の家の世話」をしてもらえるのは近隣関係のうちの32.0%であることを読み取れる。また、表5より、近隣関係のうちの64.9%が「交遊」のために利用されていることが分かる。このように、近隣関係は「留守時の家の世話」や「交遊」のためによく利用されている。

第3に、友人関係は、「交遊」で重要なことである。表5から、友人関係のうちの87.5%が「交遊」のために利用されていることを読み取れる。ところが、これ以外の状況では、サポートを期待できる友人関係の割合は15%以下である。

第4に、職場仲間関係は、もっぱら「交遊」のために利用されていることである。表5から、職場仲間関係は「交遊」だけに利用されていることが分かる。そして、「交遊」以外の状況では、職場仲間関係はサポートを入手するためにまったく利用されていない。ただし、職場仲間関係を取り結んでいる回答者は1人だけなので、この結果を一般化することはむずかしい。

#### 4 考察

第1に、パーソナル・ネットワークに占める配偶者や子どもの割合を検討したい（表1と表2を参照）。高齢者にとって最も大切なサポートの源泉は配偶者であり、同居や別居の子どもはそれに次いで重要なサポートの源泉であると言われている（古谷野ほか 1994；前田 1988；横山ほか 1994）。表1によれば、夫との社会関係はすべての社会関係の6.2%を占めている。また、表1と表2より、同居ないし別居する子どもとの社会関係はすべての社会関係のうちの19.3%を占めることが分かる。さらに、それに子どもの配偶者を含めると25.0%である。そこで、夫、子ども、子どもの配偶者が高齢女性の保有するすべての社会関係で占める割合は31.2%になる。配偶者と子どもが高齢者にとって重要なサポートの源泉であるにしても、サポートを提供するそれ以外の社会関係がかなりあるのである。

高齢女性は、親族関係として、本人方の親族だけでなく夫方の親族も多くあげていた。これは、次のような理由からであると考えられる。調査対象者が結婚した当時（1950年代から1960年代前半）、山村では女性が長男と結婚したとき、結婚後に夫の家でその両親と同居することがふつうであった。そこで、富地域の高齢女性には、自宅の近所に夫の親族がたいていいる。高齢女性は近所にいる夫方の親族にサポートを求めたり、そうした親族と「交遊」をしたりしやすい。それゆえ、高齢女性は夫方の親族を比較的多くあげたのだろう。

第2は、友人関係の同質性についてである（表3を参照）。高齢女性の友人関係はその他の間柄の社会関係よりも同質的であった。高齢女性の友人関係に占める女性の割合は91.3%と、友人の大部分が女性であった。そして、高齢女性と友人との年齢差の平均は4.56歳ととても小さかった。

このように、友人関係がきわめて同質的であったのは、次のような理由からだろう。個人と相手とが同質的であるほど、両者は話題や体験を共有し、同じような価値観を持っている。そのため、お互いに相手を理解しあえ、話がはずむ。こうしたことから、個人は同質的な相手と社会関係を取り結ぶ傾向がある。ところで、個人が社会関係を取り結ぶとき、さまざまなことに制約される。親族関係は、血縁や婚姻で結ばれた限られた人々の中から一部の人々を選んで取り結ぶ。近隣関係は、近所に暮らしている限られた人々の中から一部の人々を選んで取り結ぶ。また、職場仲間関係を取り結ぶ相手は、職場が同じ人々に限られる。個人はこれらの社会関係をまったく自由に結び結べるわけではないのである。これに対し、遠くに居住しているきわめて多数の人々の中から、個人が自分と同じ興味や関心をもっている人々を比較的自由に選び出して、取り結ぶのが友人関係である（鈴木 1986：201-3）。その他の間柄の社会関係よりも制約を受けずに、自由に友人関係を組織できるから、友人関係は非常に同質的となると考えられる。

第3に、高齢女性はサポートの入手において社会関係を使い分けていることである。ケース単位での集計結果（表4を参照）から、次のことを指摘した。高齢女性は負担の重い手段的サポートと情緒的サポートを主に同居家族や親族に、負担の軽い、近接性が必要な手段的サポートを主として親族や近隣者に期待できた。そして、「交遊」を主に親族、近隣者、友人とおこなっていた。このように、高齢女性は社会関係を使い分けて、サポートを入手している。ケース単位の集計では、高齢女性は職場仲間からほとんどサポートを入手していないという結果であったことに注意しておきたい。

親族は負担の重い手段的サポートの提供において重要な役割を演じていた。親族関係は情緒的に強く結びついた社会関係であり、その関係を保持しようとする規範的拘束力が強いから、そうしたサポートの主要な源泉であったのだろう。つまり、「課題特定モデル」が示唆するように、社会関係の特徴が支援する課題に適合していたから、親族関係が主要なサポートの源泉となったのである（Litwak & Szelenyi 1969）。さらに、親族は、負担の軽い、近接性が必要な手段的サポートの重要な源泉でもあり、多くの高齢女性は親族と「交遊」をしていた。親族関係はそのような支援の課題と適合的とはいえないにもかかわらず、そうしたサポートの主要な源泉であった。この結果は「課題特定モデル」に反している。

「課題特定モデル」と齟齬する結果となったのは、次のような理由からであると考えられる。前述した理由で、富地域の高齢女性には、自宅の近所に夫の親族がたいていいる。加えて、現住所や富地域内で生まれ育った高齢女性が多い(28.8%)。そうした高齢女性には、自らの親族が富地域内にいる。高齢女性は近くにいる親族に負担の軽い、近接性が必要な手段的支持を頼むことができ、そうした親族と「交遊」をしやすい。そのために、親族にそうしたサポートを期待できる高齢女性の割合や親族と「交遊」する高齢女性の割合が高かったと考えられる。

第4に、ケース単位の集計結果(表4を参照)とタイ単位の集計結果(表5を参照)を比較する。一般的には、対応する両方の割合の間に差があっても、その差は極端に大きくない。つまり、ケース単位の割合が大きければ、それに対応するタイ単位の割合も大きい傾向がある。例えば、「心配事の相談」における同居家族関係からのサポートでは、ケース単位の割合は34.6%であり、タイ単位の割合は42.1%であった。このように両方の割合は極端に大きな差がないので、ケース単位での集計だけでなくタイ単位での集計によっても、社会関係がサポート提供の機能において特化していることをやはり確認できる。

しかしながら、ケース単位の割合がタイ単位の割合よりも非常に低くなる場合がいくつかあった。まず、友人との「交遊」である。ケース単位の割合は26.9%にすぎないのに対し、タイ単位の割合は87.5%にもなる。次に、職場仲間との「交遊」である。ケース単位の割合は1.0%にすぎないのに対し、タイ単位の割合は100%になる。前述のように、高齢女性は平均して友人関係を0.77、職場仲間関係を0.06取り結んでいた。このように、高齢女性が組織しているある間柄の社会関係の平均が1よりもかなり小さいとき、タイ単位の割合が大きいかかわらずケース単位の割合がとて小くなることがある。そうした間柄の社会関係がサポートの提供で大きな働きをしているにもかかわらず、そうした間柄の社会関係を保持していない高齢女性が多いため、ケース単位による集計ではその働きが過小に表示されてしまうのである。

逆に、ケース単位の割合がタイ単位の割合よりも高くなる時がある。親族関係では、ケース単位の割合がタイ単位の割合よりもすべての状況で高い。例えば、「借金」では、ケース単位の割合は50.0%であるのに対し、タイ単位の割合は31.1%である。また、「心配事の相談」では、ケース単位の割合は48.1%であるのに対し、タイ単位の割合は30.0%である。このように、ケース単位の割合がタイ単位の

割合よりも大きくなってしまふのは、高齢女性が平均して親族関係を2.69と1よりもかなり多く保持しているからである。個々の親族関係はケース単位の割合で示されるほどにはサポートの提供をおこなっていないにもかかわらず、多くの高齢女性が複数の親族関係を保持しているために、ケース単位による集計では親族関係の働きが過大に表示されてしまうのである。

高齢女性は平均して2.19の近隣関係を保有していた。このように多くの高齢女性は複数の近隣関係を取り結んでいたから、近隣関係ではケース単位の割合がタイ単位の割合よりも高いであろうと予想できる。「入院時の世話」と「交遊」以外の状況では、予想の通りに、ケース単位の割合がタイ単位の割合よりも高かった。ところが、「入院時の世話」と「交遊」ではそうではなかった。「入院時の世話」を近隣者に期待できる高齢女性はいなかったため、ケース単位の割合もタイ単位の割合も0%となり、両者の間に差がなかった。近隣者との「交遊」では、タイ単位の割合がケース単位の割合よりも高かった。予想とは逆の結果になったのは、近隣関係を「交遊」のために利用していたのは、一部の高齢女性だけであったからである。

## 5 結論

本稿の目的は、岡山県富地域の高齢女性を対象にした調査データを分析することによって、高齢女性が組織するパーソナル・ネットワークの基本的特徴を明らかにすることであった。分析によって、次の5点が明らかになった。

(1) 高齢女性が組織するパーソナル・ネットワークの平均規模は6.63であった。その内訳は、同居家族関係0.91、親族関係2.69、近隣関係2.19、友人関係0.77、職場仲間関係0.06である。その構成割合は、同居家族が13.8%、親族が40.6%、近隣者が33.1%、友人が11.6%、職場仲間が0.9%である。

(2) 高齢女性が同居家族関係を取り結ぶ相手は、配偶者、子ども、子どもの配偶者といった1親等以内の親族が主である。また、親族関係を取り結ぶ相手は、子ども、子どもの配偶者、兄弟姉妹、配偶者の兄弟姉妹、兄弟の配偶者といった2親等以内の親族が主である。

(3) 同居家族関係を除いて、高齢女性は同性である女性と社会関係を取り結ぶ傾向があった。また、年齢の近い相手と近隣関係と友人関係を取り結んでいた。とくに、高齢女性の友人は91.3%が女性で、高齢女性本人との年齢差の平均が4.56というように、友人関係はきわめて同質性が高かった。

(4) ケース単位の分析によって、高齢女性はサポートの入手において社会関係を使い分けていることが分かった。高齢女性は負担の重い手段的サポートと情緒的サポートを主に同居家族と親族に、負担の軽い、近接性が必要な手段的サポートを主として親族と近隣者に期待できた。そして、「交遊」を主に親族、近隣者、友人とおこなっていた。

(5) ケース単位での分析によって、社会関係がサポート提供の機能で特化していることが明らかになったが、タイ単位での分析によってもそのことを確認できた。ただし、ケース単位の割合とタイ単位の割合の間に乖離がある場合もあった。高齢女性を取り結ぶ平均の友人関係数と職場仲間数は1よりもかなり少なかったので、友人関係と職場仲間関係との「交遊」ではタイ単位の割合がケース単位の割合よりもとても高くなった。逆に、高齢女性を取り結ぶ平均親族関係数は1よりもかなり多かったために、親族関係についてはケース単位の割合がタイ単位の割合よりも高くなった。高齢女性を取り結ぶ平均近隣関係数も1よりもかなり多かったために、近隣関係ではケース単位の割合がタイ単位の割合よりも高い傾向があった。ただし、近隣者との「交遊」では逆にタイ単位の割合がケース単位の割合よりも高かった。これは、一部の高齢女性だけが近隣関係を「交遊」のために利用していたからである。

(注)

- (1) 古谷野ら(1995)の調査は本稿で報告する富地域での調査とソーシャル・サポートの質問方法で相違していることを指摘しておきたい。古谷野らの調査では、「過去6カ月以内における手段的・情緒的サポートの入手の有無」といった事実を質問した。この方法では、高齢女性が別居子とサポートを入手できるような関係にあったとしてもサポートを他人に求める必要がなかったら、別居子の名前をあげることはない。サポート入手の有無の事実を質問する方法にはそうした欠点があるから、富地域の調査ではサポート入手の可能性を尋ね、「交遊」のみ事実を質問した。
- (2) 本稿の集計方法は、古谷野らの集計方法(古谷野1994)とは少し相違していることを指摘しておきたい。古谷野らは、回答者にすべての

同居家族、別居子、別居子の配偶者をあげてもらい、回答者にサポートを提供する同居家族や親族の割合をタイ単位の割合としている。ところが、本稿の分析では、回答者が5つの状況のいずれかでサポートを同居家族員から入手できるとき、同居家族関係を取り結んでいると定義した。また、富地域の調査では回答者にすべての別居子の配偶者をあげてもらったわけではない。そこで、本稿では、回答者が8つの状況のいずれかでサポートを親族から入手できるとき、親族関係を取り結んでいるとした。古谷野らの研究とはこうした違いがあるので、本稿では、同居家族関係や親族関係を取り結ぶ相手の中で回答者にサポートを提供する同居家族や親族の割合をタイ単位の割合とした。

(引用文献)

- 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・児玉好信. 1994. 「社会関係の研究における分析単位の問題——ケース単位の分析とタイ単位の分析——」, 『老年社会科学』, 第16巻第1号, 11-18頁.
- 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・児玉好信. 1995. 「老親子関係に影響する子ども側の要因——親子のタイを分析単位として——」, 『老年社会科学』, 第16巻第2号, 136-145頁.
- Litwak, Eugene, and Ivan Szelenyi, 1969, "Primary Group Structure and their Functions: Kin, Neighbors, and Friends," *American Sociological Review* 34 (4): 465-81.
- 前田尚子. 1988. 「老年期の友人関係——別居子関係との比較検討」, 『社会老年学』, 第28号, 58-70頁.
- 野辺政雄. 2001. 「都市化が高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートに与える影響」, 『日本都市社会学会年報』, 19号, 123-139頁.
- 鈴木 広. 1986. 「都市人の生活構造論序説」, 鈴木広著, 『都市化の研究』, 恒星社厚生閣, 190-215頁.
- 横山博子・岡村清子・松田智子・安藤孝敏・古谷野亘. 1994. 「老親と別居子の関係——団地に居住する女性老人の場合——」, 『老年社会科学』, 第15号第2号, 119-123頁.